



令和7年2月、JRCが川棚小学校で行った出前授業の様子。



J R C S株式会社

下関初、文部科学省主催の「いーたいけんアワード」(青少年の体験活動推進企業表彰) 中小企業部門で奨励賞受賞。世界の海運を支える企業が、地域の小学生に伝えたのは、船の役割だけではありませんでした。



もし日本から船が消えたら… 下関発、未来へつなぐ海の授業

毎日の生活から考える 自分ごとの物流体験

「ぼくはバナナが好きだから、食べられなくなったら困るな…」

J R C Sが問い掛ける、「もし日本から船が消えたらどうなる？」というメッセージ。それは、子どもたちに、自分の日常と海上運送とのつながりを実感し「自分ごと」として考える機会をつくりたいという狙いが象徴されたものです。

優等生が答えそうな「船がなくなったら物流が止まる」という知識を習得するのではなく、もっと身近な視点で、船や物流の大切さを感じてほ

しい。そんな思いから生まれた海運教室は、身の回りの「食べ物の旅」を追うことから始まります。

お米やブロッコリーは食料自給率が高い一方、バナナはなんと0.01%。これほどまでに海外に依存している食べ物、どこから、どうやって日本に届くのか。空輸はわずか0.5%。そう、そのほとんどを支えているのが船なのです。

地域から広がる学びの場

川棚小学校では、警察署での社会科見学が恒例行事となっています。同じく豊浦町にあるJ R C S広報課の田上綾子さんは、交通安全運動に参加した時に、地域の警察官から「子どもたちのために一緒にやりませんか」と誘われます。

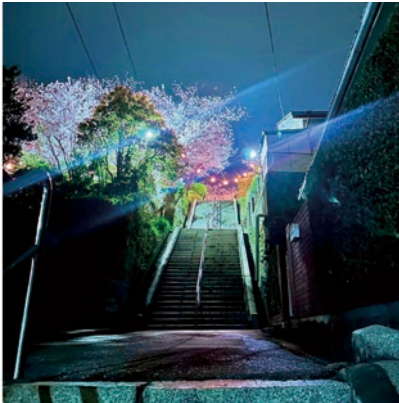
「興味を持ってもらうには：船の底の機械が…じゃなくて子どもたちに身近な題材を…」と、試行錯誤する田上さん。初めての授業は、1・2年生野菜の実物や船の模型を見せながら船の役割をお話すると、確かな手応えがありました。それから、学校の先生とも



▶身近な話題で始まるストーリー。海運が自分たちの毎日を支えていることに気付く。



市報×インスタグラム連動企画
フォロワーの皆さんが投稿した下関
の魅力が伝わる写真をご紹介します



♡ Q ▼ @yakko207さん



♡ Q ▼ @seiic2019さん



♡ Q ▼ @biei_loveさん

(上から)日和山、夕なぎ公園、道の駅さくがわ

Can You GUESS Where This Is?

Editor's note

編集後記

◆部活動って、当たり前にあるもの。いまある形が最善。そう思うのは、学校にたくさんの子供がいた時代を知る大人だけかも。少子化で、やりたい部活動ができなくなった今より、たくさんの仲間、大人と交わり、共に汗を流し、成長する。やりたいことを見つけられ、支えてくれる地域の大人がいる。地域で育つってこういうことかも。ちょっといい放課後が増える予感がした取材でした。(く)



▶世界の海で
JRCSの技術は、配電盤や監視盤として、8,000隻以上の船に載って世界の海を巡っている。



◀下関の船にも
関鯨丸や関釜フェリーなど、下関におなじみの船にもJRCSの製品が搭載されている。



▶下関初の受賞
「JRCSの受賞をきっかけに、この授業がさらに広がり、海運への理解が深まることを期待しています」(写真右から2番目：取締役経営戦略室長近藤高太郎さん)

JRCS広報課のメンバー。右が田上さん。

話し合いを重ね、5年生が社会科の学習で運輸や貿易を学ぶタイミングに合わせて開催することや、海峡ゆめタワーの高さと比べてコンテナ船の大きさを紹介するなど、より身近に感じられる工夫が加わり、令和6年10月、海運教室の形が整いました。

子どもたちは「パンが食べられるのは小麦を運んでくれる船のおかげに感謝したい」など、新たな気付きをたくさん話してくれました。先生からも「子どもたちからユニークな声が続々と飛び出した」と好評。今や豊浦町内にとどまらず、市内全域の学校から依頼が来るほどになりました。

「授業を受けた子どもたちの中から、未来の海の仕事を担う人材が生まれるかもしれません。授業での体験を通じて、海運に興味を持ってください」と期待を込める田上さん。

授業を受けた子どもたちは、きつと家族や身近な人たちに自慢げに海運のお話をしていくことでしょう。

海運の未来を担う仲間たちへ

JRCSは、「海上物流を絶対に止めない」をミッションに、船舶機器の制御盤の製造などを通じて、海の安全や国際物流を支えています。